

ペトルス・ヨハニス・オリヴィ 『哲学者たちの著書を読み通すことについて』 試訳

著者	石田 隆太
雑誌名	宗教学・比較思想学論集
巻	21
ページ	49-62
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160683

ペトルス・ヨハニス・オリヴィ

『哲学者たちの著書を読み通すことについて』 試訳

石田 隆太

1 凡例

- ・訳出は次のものに基づく。
DELORME, F.M. (ed.), “Fr. Petri Joannis Olivi tractatus “De perlegendis Philosophorum libris,,,” *Antonianum* 16 (1941): 37–44. ※Delorme と略記。
- ・参照した現代語訳は次の通りである。
KÖNIG-PRALONG, C., RIBORDY, O., SUAREZ-NANI, T. (tr.), “Comment il faut lire les œuvres des philosophes,” in *Pierre de Jean Olivi - Philosophe et théologien*, Berlin: Walter de Gruyter, 2010, 431–49. ※Pralong et al. と略記。
- VIAN, P. (tr.), “La lettura dei libri dei filosofi,” in PIETRO DI GIOVANNI OLIVI, *Scritti scelti*, Roma: Città Nuova Editrice, 1989, 96–103. ※Vian と略記。
- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補い部分であり、〔 〕 は原語の引用部分である。
- ・指示語および指示語を含む語句に関しては、必要に応じて指示内容を明確化して訳出するようにした。また省略されていると思われる文言については、[] を付さずに補った箇所がある。

2 はじめに

本稿では、西洋中世のスコラ学者ペトルス・ヨハニス・オリヴィによる小著『哲学者たちの著書を読み通すことについて』（*De perlegendis philosophorum libris*, 1270年初頭ないし1274年～1276年頃）¹の訳出を試みる。聖書のなかの一節を引用しその解説から始まるこの小著は、基本的に、キリスト教神学を学ぶ者が世俗的な哲学（*philosophia*

¹ 著作年代については未だに定説がない状態ではあるが、1270年初頭と見るのはオリヴィの教育キャリアの前に書かれたとする見解である：SUAREZ-NANI, T., “La sagesse chrétienne comme instance critique en philosophie: une introduction à la lecture du «De perlegendis philosophorum libris»,” in KÖNIG-PRALONG, C., RIBORDY, O., & SUAREZ-NANI, T. (ed.), *Pierre de Jean Olivi - Philosophe et théologien*, Berlin: Walter de Gruyter, 2010, 411. 1274年～1276年頃と見るのは、オリヴィの専門家ピロンによる比較的最近の診断である：PIRON, S., “Deplatonising the Celestial Hierarchy: Peter John Olivi’s Interpretation of the Pseudo-Dionysius,” in IRIBARREN, I., & LENZ, M. (ed.), *Angels in Medieval Philosophical Inquiry: Their Function and Significance*, Farnham: Ashgate 2008, 30n3. パリ司教エティエンヌ・タンビエによる1277年の禁令よりも前に見る点が両者には共通していると言える：SUAREZ-NANI, “La sagesse chrétienne,” 411.

mundana) とどのように向き合うべきなのかという心構えを述べた著作である。その点で研究者たちが本書を教育的な配慮によるものだとする可能性を提示しているのは適切であろう²。なおここで「哲学者たち」として念頭に置かれているのは、大文字の哲学者 (Philosophus) アリストテレスのみならず、プラトン、プロクロス、アヴィセンナ、アヴェロエスをも想定することができる (第20-21節)。

まずは本書の内容を概観することにしたい。「神はこの世俗の知恵を愚かとされた」という「コリントの信徒への手紙一」第1章第20節の文言を冒頭に引用した上で、オリヴィはこの文言から世俗的な哲学が持つ四つの点を読み取る。すなわち、①誤謬の虚偽性、②理性の真理性、③伝承の空虚さ、④探求の特定性ないし僅少さである (第1節)。この四つの点は著作全体を通じて説明されることになる。スアレス＝ナーニによれば、本書の内容は次のように整理できる³。

第1-3節：導入

第1節：聖書の一節 (一コリ 1,20) の意味

第2節：前節で与えられた解釈の正当化

第3節：世俗的な哲学に対して採用すべき態度

第4-7節：第一部：世俗的な哲学の虚偽性

第4節：諸原理、諸論理⁴、諸結論における虚偽性

第5節：諸原理の虚偽性

第6節：諸論理の虚偽性

第7節：諸結論の虚偽性

第8-12節：第二部：知恵としての哲学

第8節：題材、様式、そして最近接の目的における知恵

第9節：題材ないし主題において

第10節：形式ないし様式において

第11節：最近接の目的において

第12節：哲学においては虚偽と混在した真理の部分がある

第13-16節：第三部：世俗的な哲学の空虚さ

第13節：思い上がり、慢心、目的のゆえに

第14節：無謀さと思い上がり

第15節：好奇心と慢心

第16節：不十分で空虚な目的

² PIRON, S., "Olivi et les averroïstes," *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie* 53 (1-2) (2006): 273-75; BARTOLI, M., "Opere teologiche e filosofiche di Pietro di Giovanni Olivi," *Archivum franciscanum historicum* 91 (3-4) (1998): 466.

³ SUAREZ-NANI, "La sagesse chrétienne," 412-13.

⁴ 《arguments》は、本来は「諸議論」とすべきだが、本稿の試訳との兼ね合いで「諸論理」とした。ラテン語原文では《rationes》である。

第 17-23 節：第四部：世俗的な哲学の狭さおよび特定性

第 17 節：諸事物、諸言述、諸慣習および意志に関する探究において

第 18 節：物体的本性の分析において

第 19 節：理性的本性の検討において

第 20 節：離存実体の把握において

第 21 節：第一原因⁵の認識において

第 22 節：言述の哲学において

第 23 節：人間の諸慣習や統治に関する教説において

全体としては五部構成と言えるが、行論を三つに秩序づける傾向がしばしば見られる。導入は三つの節から構成されているし、第一部～第四部のそれぞれで主要に取り扱われる論点も三つに分けられている。これは、オリヴィも師事したフランシスコ会の巨頭ボナヴェントゥラがしばしば自らの著作において用いる手法と類似している⁶。

各節の詳細な内容紹介は試訳をもって代えることにしたいが、最後に、本書が単なる反哲学のパフレットに尽きるわけではないという見解を紹介しておこう。スアレス＝ナーニによれば、哲学について特に否定的なことを述べる第一部と第三部は合計 8 節であるのに対して、それよりも肯定的ないし建設的なことを述べる第二部と第四部は合計 12 節である。そのことから彼女が示唆しているのは、オリヴィはどちらかと言えば知恵としての哲学や哲学の限界について語ることに重きを置いているということである⁷。本書の校訂版を最初に公刊したデロルムも、本書を単なる反哲学論ないし反アリストテレス論としてのみ受容することに対して否定的であった⁸。そもそも、ここで言われる哲学が全く不要のものであれば、哲学書をいかにして読み通すべきかは端から問題ではなかっただろう。確かなのは、時代や文脈に応じて哲学の使用が問題にされているということである。この問題意識は、哲学と神学の関わりを問い続けるスコラ学だけのものではない。正当なことに本書はこの問題を考えるための題材として今もなお注目することができるだろう⁹。

⁵ 《la nature première》と言われているが、端的には神のことであるため、よりわかりやすい表現として「第一原因」に置き換えた。

⁶ SUAREZ-NANI, “La sagesse chrétienne,” 413. ボナヴェントゥラの著作としては、『精神の神への道程』(Itinerarium mentis in Deum)、『諸学芸の神学への還元』(De reductione artium ad theologiam)、『聖霊の七つの賜物に関する講話』(Collationes de septem donis Spiritus Sancti) 第 4 講話、『三様の道』(De triplici via) を想定することができる。

⁷ SUAREZ-NANI, “La sagesse chrétienne,” 414.

⁸ Delorme, 33.

⁹ 本稿は、JSPS 科研費 17J00136 および 18K12191 の助成を受けたものである。翻訳の作成にあたっては、小沢隆之、本間裕之の各氏より数々の有益な助言を頂戴した。この場を借りて最大限の謝意を表したい。

3 試訳

哲学者たちの著書を読み通すことについて

「神はこの世俗の知恵を愚かとされた」¹⁰
(一コリ 1, 20)

1. われわれが哲学者たちの著書を読み通すにあたってどのような仕方着手すべきかを知るために、使徒パウロによる前述の言葉がある。それは世俗的な哲学において特に注目されるべき四つのことをわれわれに教えている。すなわち、誤謬の虚偽性 [falsitas erroris]、理性の真理性 [veritas rationis]、伝承の空虚さ [vanitas traditionis]、探究の特定性ないし僅少さ [particularitas seu modicitas perscrutationis] である。知恵が「愚か」だと正当にも言うことができるのは誤謬の虚偽性に基ついでである。どのような仕方であれそれが「知恵」だとすることができるのは理性の真理性に基ついでである。知恵が神のおよび天上的なものではなくて「世俗の」ないし世俗的なもの、あるいは時間的なものだと言うことができるのは伝承の空虚さに基ついでである。知恵が「この」世俗のものだと言うべきであるのは探究の特定性ないし僅少さに基ついでである。「この」は感覚に対して指示を促す特定の代名詞 [すなわち指示代名詞] である。

2. 世俗的な哲学がそのようなものだとしても驚くべきではない。なぜなら、世俗的な哲学の著者たちは [実際に] そうだったからである。すなわち彼らは、本性的な知解の光に属する何かを有していたので、真理に属する何かを書くことはできた。しかしながら、それを原罪および現実的な汚れ [macula actualis] の暗闇とともに有していたので、虚偽に属する多くのことを真理と混在させざるをえなかった。さらに、僅かな量と多くの質料性においてそれを有していたので、彼らの探究は特定の仕方真理において着手されざるをえなかった。さらに彼らは、信仰の光や神の恩寵ないし友愛をともなわずにそれを有していたので、空虚さに従わざるをえなかった。そして、彼らは以上のことにおいて著しく際立っていたので、アリストテレスは『形而上学』第2巻でこう言わざるをえなかった。すなわち、彼らの目が自然の最も明白なことごとと関わるのは、鼻の目が太陽に対するようであると¹¹。そのようなわけで、同所で彼が言うように、彼らにとって真理の考察は大部分において困難であったので、最初に哲学した人々は真理についてまず始めに僅かなことを伝えただけだった¹²。

¹⁰ 「コリントの信徒への手紙一」第1章第20節「知恵ある者はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではありませんか」。この箇所も含めて、本稿で聖書の翻訳を引用する際には聖書協会共同訳を用いた。

¹¹ アリストテレス『形而上学』第2巻第1章993b8–11「ここでいう困難の原因は、事柄それ自体のうちにあるのではなくて、われわれ自らの〔知能の〕うちにあるのであろう。というのは、あたかも真昼の光に対する夜鳥の目がそうであるように、そのようにわれわれの靈魂の目すなわち理性もまた、自然においてなによりも最も明らかな事柄に対してはそうだからである」(『アリストテレス全集12』、出隆=訳、岩波書店、1968年、51頁)。

¹² アリストテレス『形而上学』第2巻第1章993b11–14「われわれは、たんにわれわれの同意しうる意見をもつ人々に対してのみでなく、さらにいっそう皮相な意見を吐いた人々に対しても、感謝するのが

3. したがってこの哲学は、愚かなものであるので、用心して読み通すべきである。さらに、真理に属する何らかの火花がもたらされるので、分別をもって読み通すべきである。さらに、この哲学は空虚なものであるので、それを目的ないし終局としてではなくて方途として、中継地ないし課程のように使用しながら読み通すべきである。さらに、僅かなものでありいわば子ども向けの、ないし教育的なものであるので、奴隸的ではなくて主人のように〔dominative〕読むべきである。というのもわれわれは、この哲学の追従者ではなくて判定者であるべきだからである。それゆえ、アウグスティヌスは『キリスト教の教え』第2巻の終わりあたりで言う：「したがって、熱心で才能があり、神を畏れながらも至福なる生を求める若者に対しては次のように指図するのがまともだと私には思われる。すなわち、至福なる生をいわば養成するためにキリストの教会の外で行使されるいかなる教えに対しても思い切って安心のままに従うのではなく、むしろ節度と注意をもってその教えを判断するようにと。そして仮に、人間によって設定されたものとして見出されるような諸々の教えがあつて、その教えは、設定する人々の相異なる意志のゆえに多様であり、誤謬を犯した人々の疑念のゆえに知に至らないものであるとしよう。もしその人々がとりわけ悪霊と、何らかの意味表示に属する或る取り決めや慣わしのようなものによって始まった交わりを持ってもいたとするなら、その教えは徹底的に拒否して嫌悪するようにと〔指図するのがよい〕」¹³。

4. さて、もし君がどの場合に哲学が愚かで虚偽であるのかを観たいなら、それが虚偽性を有するのは、依拠する諸原理、それによって導出される諸論理、追求する諸結論においてであることに注目せよ。そしてこの三つを使徒パウロは同時に示している。曰く、コロ2,8「あなたたちをたぶらかすのに哲学や空っぽの虚偽によってし、しかもキリストに従ってではなく人間たちの伝承やこの世俗の諸元素に従っている者を見ないようにしなさい」¹⁴。すなわちパウロは、哲学が虚偽の結論を有することを見ているので、「あなたたちをたぶらかす者を見ないようにしなさい」と言う。さらに、哲学のうちに

至当である。なぜならこの人々でも、われわれに先んじて知的性能を練って来てくれた点で、なんらかの貢献をしている人々であるから」（出訳、52頁）。

¹³ アウグスティヌス『キリスト教の教え』第2巻第39章第58節「したがって神を畏れ、幸福な生活を求める、熱心で才能のある青年たちに次のようにすすめることがふさわしいと思われる。キリスト教会の外で習ういかなる学問も、いわば幸福な生活に到るための配慮なしに追求すべきでなく、これらの学問を覚めた気持で、しかも熱意をもって評価すべきである。ある種の学問は人間が考え出したものであり、考え出した人々の意志がまちまちのために一定せず、誤まって下される推定のために明晰でない。とくにダイモンとの間にある種の記号をもちいて締結され、契約された協約が発効しはじめていならば、これを断乎として拒否し嫌悪しなくてはならない」（『アウグスティヌス著作集6』、加藤武＝訳、教文館、1988年、139頁）。現在私たちがアウグスティヌスの校訂版で見ることのできるテキスト（*Corpus Christianorum Series Latina, XXXII, Aurelii Augustini Opera, pars IV, 1, ed. I. Martin, 1962, 72*）と、オリヴィによる引用で大きく異なるのは、「養成する」と訳した《expascendam》という部分である。CCSLでは《capescendam》（72, 5）であり、引用した加藤訳では「到る」と訳されていると思われる。オリヴィによる引用を訳すにあたっては、Vianにおいて《nutrire》（97）と訳されていることを参考にした。

¹⁴ 「コロサイの信徒への手紙」第2章第8節「空しいだまし事の哲学によって、人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、人間の言い伝えに基づくもの、この世のもろもろの霊力に基づくものであり、キリストに基づくものではありません。」

ある虚偽の諸論理を見ているので、「空っぽの虚偽によって」と言う。さらに、哲学のうちにある諸原理を見ているので、「この世俗の諸元素に従って」と言う。というのも、哲学の諸原理は感覚と可感的な諸元素からとられるからである。そして、この三つの欠陥の原因は、「キリストに従っていない」ということであった。

5. 諸原理の愚かさについては、使徒パウロによる次の箇所を受け取ることができる：一コリ 2, 14「動物的な人間は神の霊に属することを捉えない。実際、その人にとってそれは愚かなことであり、知解できないことである。なぜなら、それは霊的に検証されることだからだ」¹⁵。すなわち、真理の諸原理は最も霊的で最も抽象的であり、「動物的な人間」が捉えられなかったものである。なぜなら、それらの検証や経験は感覚的ではなくて霊的なものだからである。そのようなわけで、先行する章においてあるように、「十字架の言葉」はたしかに「滅びる人々にとっては愚かなものである」¹⁶。なぜなら十字架は、現世の諸感覚を死なせることで、あらゆる動物的な哲学者〔*philosophus animalis*〕によっては把握できない最も霊的な真理を自らのうちに有しているからである。かくして、箴 22, 15 にて最善の仕方で行われるように、「愚かさは子どもの心に縛りつけられており、論しの杖がそれを遠ざけるだろう」¹⁷。というのも、子どもたちは諸感覚にのみ係うからである。アリストテレスも『後書』の終わり¹⁸や他のほとんどの箇所で証言しているように、哲学者たちの諸原理は感覚や感覚の経験からとられていた。それゆえ曰く、「われわれは諸原理を諸項として認識するが、その項を把握するのは感覚によってのみである」¹⁹。そして十字架の「杖」は、感覚より上位にある信仰の諸原理をわれわれがとるように教えることで、こうした愚かさを「遠ざけるはずである」²⁰。

6. 諸論理の愚かさについては、次の箇所を受け取ることができる：哀 2, 14「あなたの預言者たちは、あなたのためにさまざまな虚偽を見た。また、あなたを悔悛へと促すために、あなたの不正をあなたに対して暴くことはしなかった。彼らは、あなたのため

¹⁵ 「コリントの信徒への手紙一」第2章第14節「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊に属する事柄は、霊によって初めて判断できるからです」。

¹⁶ 「コリントの信徒への手紙一」第1章第18節「十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です」。

¹⁷ 「箴言」第22章第15節「若者の心に無知は付き物。これを遠ざけるのが論しの杖」。

¹⁸ アリストテレス『分析論後書』第2巻第19章。

¹⁹ この引用は次の二つの箇所を合わせたものであると思われる：アリストテレス『分析論後書』第1巻第3章 72b23–25「われわれは論証的知識があるだけでなく、知識の原理があるとも主張する。この原理によってわれわれは無中項の諸項の項連鎖を認識する」（高橋久一郎＝訳、『アリストテレス全集2』、今井知正、河谷淳、高橋久一郎＝訳、岩波書店、2014年、350頁）；第2巻第19章 100a3–9「感覚から記憶が生じ、同じ事柄について繰り返された記憶から経験が生じる。というのも、数において多くの記憶が一つの経験であるからである。経験から、あるいはむしろ、記憶され経験されたすべての感覚された普遍が魂の内で静止することから、つまり、多くの事柄から離れた一が静止するとき、すなわち、これらすべての事柄の内にある同一の事柄が静止するとき、技術と知識の原理が生じる。つまり、生成については技術の、「あるもの」については知識の原理がある」（519–20頁）。

²⁰ ただし、オリヴィンにおいては感覚認識が肯定的に受け取られる側面もある。詳しくは次を見よ：BOUREAU, A., “Les cinq sens dans l’anthropologie cognitive franciscaine: De Bonaventure à Jean Peckham et Pierre de Jean Olivi,” *Micrologus* 10 (2002): 277–94.

に虚偽の仮定や棄却するべきことをさまざま見た」²¹。すなわち、仮定は大前提において生じその大前提から棄却が生じるのであるから、われわれは自分にとって適切だと思われる項を選び取ることで不適切な項を却下している。しかるに、バアルの預言者たちはこうしたさまざまな虚偽を見た。それゆえ彼らは、身体に即しても魂に即しても、人類の消滅を暴くことができなかった。これこそ「愚かな羊飼いの道具」であり、これに関するのはゼカ 11, 15 である²²。「あらゆる人間は自らの知において愚かになったのであり、偶像のあらゆる職人は恥ずかしくなった。というのは、職人が合成したものは虚偽のものであり、それには息がないからである」。エレ 10, 14 にあるように、「あらゆる人間は自らの知において愚かになった」²³。

7. また諸結論の虚偽性については、使徒パウロによる次の箇所を取りあげることができる：ロマ 1, 21-22 「彼らの心は鈍く暗くなっている。というのも彼らは、自分は知恵者であると言いながらも愚かになったからである」²⁴。ここでは明白に世俗の諸哲学について語られている。ここから直ちにパウロが示しているように、彼らは、神に関しては最悪で虚偽に塗れきった三種類の結論に陥り、自分自身についても他の三種類の結論に陥った。すなわち、パウロが言うように、神の偉大さへの礼拝を被造的な想像物への礼拝に、永遠の真理への礼拝を誤った偶像への礼拝に、永遠の善性への礼拝ないし[それの]味わいをあらゆる悪への「下劣な感覚に」変えた²⁵。これらは、神に関する誤謬に満ちた結論であり、神に帰属する三つのことに即している。この諸結論に随伴して自分自身に関する他の三つの結論があり、それは同所で明らかな通りである。

8. さて、もし君が知恵や真理に属するどんなものを哲学が有するかを観たいなら、次のことに注目せよ。すなわち哲学は、題材 [materia] ないし主題、形式 [forma] ないし様式、そして最近接の目的において理性の知恵を有するのだから、知恵や知恵の性向 [habitus] に属する三つの業に関して知恵を有している。その知恵ないし知恵の性向とは、『倫理学』第 6 巻で伝えられるように、最も高次で有用で確実なことを、しかも最も確実かつ完全に考察するものである²⁶。

9. まず、哲学は自らの主題において真に属する何かを有している。というのは、それ

²¹ 「哀歌」第 2 章第 14 節「あなたの預言者たちは空しく役に立たない幻を見た。あなたを立ち直らせるために過ちを暴くことをしなかった。彼らはあなたのために空しい偽りの託宣を幻に見た」。

²² 「ゼカリヤ書」第 11 章第 15 節「主は私に言われた。あなたはもう一度愚かな牧者の道具を取れ」。

²³ 「エレミヤ書」第 10 章第 14 節「人は皆、愚かで知識がない。鋳物師は皆、偶像のゆえに恥をかく。鋳物の像は偽りにすぎずその中には息がない」。

²⁴ 「ローマの信徒への手紙」第 1 章第 21-22 節「なぜなら、彼らは神を知りながら、神として崇めることも感謝することもせず、かえって、空しい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。自分では知恵ある者と称しながら愚かになり」。

²⁵ 「ローマの信徒への手紙」第 1 章第 28 節「彼らは神を知っていることに価値があると思わなかったので、神は、彼らに無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました」；第 23-27 節。個別には主として、神の偉大さの礼拝が被造的な想像物の礼拝に変えられることは第 23-24 節で、永遠の真理の礼拝が誤った偶像の礼拝に変えられることは第 25 節で、永遠の善性の礼拝があらゆる悪の下劣な感覚に変えられることは第 26-27 節で言われている（とオリヴィは理解しているはずである）。

²⁶ アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 7 章。

が主題として受け取るのは諸々の非有ではなくて諸部分をともなった有〔ens〕だからである。そして、知の真理性には主題や対象の真理性とわれわれの知性の様式が協働するのだから、彼らは諸々の学知や実体の区分を、完全な有の区分に即しても、われわれの〔知性による〕把握の様式に即しても、それぞれ受け取っていた。それゆえ彼らは、或る存在はわれわれに拠らない有であり、或る存在はわれわれの理性の有であり、或る存在はわれわれの意志や行為の有であるということを見ていたので、諸学を实在学〔*scientia realis*〕、理性学〔*scientia rationalis*〕ないし言述学〔*scientia sermocinalis*〕、実践学〔*scientia practica*〕に区分した。その際、实在学を四科に、言述学を三学に、実践学を諸々の形而上学、倫理学ないし政治学に帰属させている。そして、われわれの知性は事物をめぐって三段階に上昇する。すなわち、或るものは可感的性質の助力によって把握し、或るものは想像されうる量〔*quantitas imaginabilis*〕の助力によって把握し、或るものは可知的何性〔*quidditas intelligibilis*〕の形象によって把握する。あるいは、或るものは運動と量とともに把握し、或るものは運動をともなわずに量とともに把握し、或るものは運動も量もともなわずに把握する。したがって彼らは、实在学ないし観照学〔*scientia speculativa*〕を自然学、数学、形而上学ないし神的学に区分した²⁷。さらに、理性の有は真なること、相応しいこと、説得的なことを見出すのに関わるものであったので、彼らは諸々の理性学ないし言述学を、相応しい言述を見出すことに従事する文法学、真らしき推論を見出して判定することに従事する論理学、修辞学的ロクスや象徴的ないし詩学的転義法によって説得的で魅力的な推論を見出すことに従事する修辞学および詩学に

²⁷ 観照的な学問を自然学、数学、形而上学に区分することは同時代的にも一般的なことである：ポナヴェントゥラ『諸学芸の神学への還元』第4節「〈自然〉哲学は〈固有の意味で言われる自然学〉と〈数学〉と〈形而上学〉の三つに分けられる。つまり、〈自然学〉は自然力と種子の諸原理とに従う事物の生成と消滅について考察し、〈数学〉は知性的諸原理に従う抽象的諸形相について考察し、〈形而上学〉はすべての存在者の認識に関わって考察し」（伊能哲大、須藤和夫＝訳、『中世思想原典集成12』、上智大学中世思想研究所＝編訳・監修、平凡社、2001年、460頁）；トマス・アキナス『ボエティウス「三位一体論」註解』第5問題第1項主文「観照されうるもののうちの或るものは、現実には質料に依存しているものである。なぜなら、それらは質料のうちにある以外にはありえないのであるから。そして、これらは更に区分される。すなわち、或るものは、現実にもまた概念的にも質料に依存している。つまり、それらの定義には可感的質料が措定され、従って可感的質料なしには理解されえないようなものがそれである。例えば、人間の定義においては肉と骨を入れなければならないように。そして、こうしたものに関わるのが、ピュシカないし自然学である。また、或るものは、現実には質料に依存しているとはいえ、しかし、概念的にはそうでないものである。なぜなら、それらのものの定義には、可感的質料が措定されないからである。例えば線や数のように。そしてこれらに関わるのが数学である。ところで、何か或る観照されうるものは現実に質料に依存しないものである。というのは、それらが質料なしに在りうるからであるが、それらには、神や天使のように決して質料のうちにあることのないものと、実体、性質、在るもの、可能態、現実態、一と多、その他こうしたもののように、或る場合には質料のうちにある、或る場合にはない、というものがある。これらすべてのものに関わるのが神学、すなわち神的学である。このように名づけられるのは、この学においては認識されるものの主たるものが神だからである。これはまた他の名称を用いれば形而上学と呼ばれる。形而上学とは、すなわち自然学を超える学であるが、それは、我々に、自然学の後に学ぶべきものとして現れるからであり、我々は可感的物から、非可感的物へと進まなければならないからである」（長倉久子＝訳、トマス・アキナス、『神秘と学知——『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究』、創文社、1996年、360-61頁）。

区分した²⁸。他方で、われわれの意志や行為の有は主要には三つのもの、すなわち魂、生命的身体ないし身体が生、外在する質料に関わるので、彼らは実践学を倫理学ないし政治学、医学ないし治療学〔*scientia curativa*〕²⁹、形而上学に区分した³⁰。

²⁸ 言葉に関する学問の区分についてもオリヴィは基本的に伝統に忠実である：ボナヴェントゥラ『諸学芸の神学への還元』第4節「〈言語〉哲学ないし理性哲学は三つに分けられる。すなわち、〈文法学〉、〈論理学〉、〈修辞学〉である。これらのうち、第一のものは表現するために、第二のものは教示するために、第三のものは人を動かすためにある。第一のものは〈把握する〉ために、第二のものは〈判断する〉ために、第三のものは〈動機づける〉ために、理性に関係する。そこで、理性は〈適切な〉言葉によって把握し、〈真実の〉言葉によって判断し、〈飾られた〉言葉によって人を動かすのだから、それゆえ、この三つの知識は言葉のこの三つの様態を考察するわけである」（伊能・須藤訳、459-60頁）；サン＝ヴィクトルのフーゴー『ディダスカリコン』第1巻第11章「論理学はギリシア語で *logos* と言われるが、この名称は二重の意味をもっている。すなわち *logos* は言述 (*sermo*) あるいは推論 (*ratio*) を意味するので、論理学も〈言述の (*sermocinalis*) 学〉あるいは〈推論的 (*rationalis*) 学〉と意味表示される。〈推論的論理学〉は〈論証的 (*dissertiva*) 論理学〉とも言われるもので、弁証論 (*dialectica*) と修辞学をその内に含んでいる。〈言述の論理学〉は文法学、弁証論、修辞学に対するの類概念であって、その下に論証的論理学を含んでいる」（五百旗頭博治、荒井洋一＝訳、『中世思想原典集成 精選4』、上智大学中世思想研究所＝編訳・監修、平凡社、2019年、290-91頁）。

²⁹ オリヴィは医学を実践的な学問のうちに分類しているが、これは立場の分かれる論点である：ドミニクス・グンディサリヌス『哲学の区分』「自然学は普遍的である。なぜなら、その下に八つの学問が含まれているからである。すなわち、医学、占術、自然降神術、夢判断術、農学、航海術、視覚学、ものを他の種に変換する学たる錬金術である」（三浦伸夫＝訳、『中世思想原典集成7』、上智大学中世思想研究所＝編訳・監修、平凡社、1996年、828頁）；サン＝ヴィクトルのフーゴー『ディダスカリコン』第2巻第20章「人工・人造学 (*mechanica*) は機織学 (*lanificium*)、兵器学 (*armatura*)、商学 (*navigatio*)、農学 (*agricultura*)、狩猟〔食糧調達〕学 (*venatio*)、医学、演劇学 (*theatrica*) の七つの学知を含んでいる」（五百旗頭・荒井訳、314頁）。興味深いことにオリヴィは、この点に関してロジャー・ベーコンと同様の見立てをしている：ロジャー・ベーコン『哲学研究提要』(*Compendium studii philosophiae*) (MALONEY, Th.S. (ed.), *Roger Bacon, Compendium of the Study of Philosophy*, Oxford: Oxford University Press, 2018, 8, 10) 「知恵の研究は二つの部門を有する。一方は観照的な部門であり、他方は実践的および操作的 (*operativus*) な部門である。第一の部門は真理の観照にのみ存立している諸学を考察する。他方の部門は諸々の業に根づいている諸学を表出する。すなわち、文法学、論理学、自然哲学、通俗形而上学 [*vulgata metaphysica*]、五つの数学、そして他の多くの学が諸真理を観照するものであり、諸々の業には存立していない。それに対して、四つの数学（数学は全部で九つある）、錬金術、医学、道徳哲学（その下に市民法を包括している）、（教会法を伴う）神学 [*theologia*]、そして他の多くの学が、哲学の側からは実践的および操作的である。なぜなら要するに、それらは教会、国家 [*republica*]、世俗全体において有益な諸々の業を考察するからである」（拙訳）。ベーコンにおける医学については次も見よ：Köhler, Th.W., *Grundlagen des philosophisch-anthropologische Diskurses im dreizehnten Jahrhundert: Die Erkenntnisbemühungen um den Menschen im zeitgenössischen Verständnis*, Leiden: Brill, 2000, 282.

³⁰ Cf. ボナヴェントゥラ『諸学芸の神学への還元』第4節「〈動機〉の力を支配するものは三つの仕方、すなわち〈個人生活〉について、〈家族〉について、そして〈臣民大衆〉について認められるから、〈道徳〉哲学も三つに分けられる。すなわち、〈倫理学〉 (*monastica*)、〈家政学〉、そして〈政治学〉である。これらは、その名称そのものから明らかのように、今述べた三つの生活の仕方に従って区別される」（伊能・須藤訳、460頁）；サン＝ヴィクトルのフーゴー『ディダスカリコン』第2巻第19章「実践学は〈個人の実践学〉 (*solitaria*)、〈家庭の実践学〉 (*privata*)、〈公共の実践学〉 (*publica*) に区別される。あるいは別称で〈倫理学〉 (*ethica*)、〈家政経済学〉、〈政治学〉に、あるいは〈道徳学〉、〈家庭管理学〉 (*dispensativa*)、〈国政学〉 (*civilis*) に区別される」（五百旗頭・荒井訳、312頁）。実践学にも「形而上学」が分類されていることをどう理解するべきかが問題であるが、前註で引用したベーコンによる分類では「通俗形而上学」が観照的な部門に属しており、それとの兼ね合いで言われているという可能性以外のことを指摘することができない。

10. さらに、哲学は知恵を形式ないし様式において有している。すなわち [第一に]、諸々の題材に応じて秩序的に進行する。つまりその際には、一般的な題材を最初に伝えて特殊な題材を次に伝え、われわれにとってより知られている題材を最初に伝えてより隠されている題材を次に伝える。また [第二に]、証明ないし推論によって進行する。その際には、原因、結果ないし記号、導出ないし明らかに不適切で不可能なことによって、あるいは個々の経験の導入によって、そこから普遍を集積するために、多くの題材において証明を行う³¹。また [第三に]、仮定ないし仮設によって³²進行する。つまりその際には、第一の自明な諸原理を仮定し採用する。

11. さらに、哲学は知恵に属する何かを最近接の目的において有している。最近接の目的とは、観照に関することにおいては実在的真理の観想である。言述に関することにおいてはしかるべき適した言述の形成である。あるいは、より高次で精妙に語るなら、われわれの理性による活動のしかるべき規律である。というのは、言述に関することによってわれわれは、しかるべき仕方では表現し推論する術を教わるからである。そして実践に関することにおいてそれは、現世に関する限りでの人間による統治への有用性である。

12. さて、以上のすべてにおいて哲学は、真理性や有用性に属する何かを有するが、その何かは虚偽性や不利益さとの混在を多く有していることに注目せよ。それゆえ、使徒パウロは言う：一コリ 1,21 「世俗は神の知恵において知恵により神を認識することはなかったの、宣教の愚かさによって信者たちを救おうとすることを神は喜ばれた」³³。ここでパウロが言うには、哲学は「神の知恵」と呼ばれる限りにおいて「知恵」を有する。しかしながら、観照的なことに関しては、神の完全な観想という主要な目的において欠落している。それと同様に実践的なことに関しても、完全な治療や人間救済の予見という主要な目的において欠落している。

13. さて、もし君が哲学の空虚さに注目したいとしよう。それについて使徒パウロは次のように明白に言及している：ロマ 1,21 「なぜなら彼らは、神を認識していたにもかかわらず、神としての栄光を帰さず感謝もせず、かえって自らの思考に沈んでいった」云々³⁴。それなら、次のことに注目せよ。彼らは空虚な仕方では伝えていた。なぜなら、まず [第一に]、無謀で思い上がった厚かましさをともなっていたからである。すなわち、最上の教師によるしかるべき導きがなかったからである。また [第二に]、好奇心や慢心という仕方をもとなっていたからでもある。なぜなら、彼らは要するに神の語りの単純さを見てとらなかったからである。また [第三に]、不毛で、さらには憎むべき意図や目的の下にあるからでもある。なぜなら、彼らは見神を措定せず、神の神愛および恩

³¹ オリヴィによる学問的な論証に関する議論については、彼の『論理学問題集』(*Quaestiones Logicales*) 第18問題を見よ。

³² 《enuntiative》が Pralong et al.では《par hypothèse》(441) と訳されていることを参考にした。

³³ 「コリントの信徒への手紙一」第1章第21節「世は神の知恵を示されていたが、知恵によって神を認めるには至らなかったの、神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになりました」。これは、本書冒頭で引用された聖句の直後にくる箇所である。

³⁴ 「ローマの信徒への手紙」第1章第21節「なぜなら、彼らは神を知りながら、神として崇めることも感謝することもせず、かえって、空しい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです」。

寵も、しかるべき礼拝も、神への奉仕も、自らの咎ないし罰の回避も措定しなかったからである。そして彼らは、以上のことごとなしでは、不毛で憎むべきではないようなものを究極目的として措定することは全くできなかった。

14. 第一のものについては次の箇所を受け取ることができる：一コリ 3, 18-20「誰も自分をたぶらかしてはならない。もしあなたがたのなかで誰かが〔自分は〕この世で知恵者だと思っているなら、知恵者であるために愚者になりなさい。というのも、この世俗の知恵は神の下では愚かなものだからである。実際、次のように書かれている。「私は知恵者たちをその狡知において捕らえるであろう」。さらにまた、「主は、人間たちのさまざまな思考が空虚であることを知っている」³⁵。実際、同じことをパウロは言う：二コリ 3, 5「われわれは、何かがいわばわれわれに基づいているのだと自分としては考えるのに十分な者たちではない。われわれの十分さは神に基づいている」³⁶。それゆえ彼らは、神の教導なしに進んでいたので、空虚に歩んでいた。

15. さらに第二のもの、すなわち好奇心や慢心をともなう仕方に反して、使徒パウロはわれわれに教えている：一コリ 1, 17「キリストの十字架が廢れないように、言葉の知恵においてではなく」³⁷。それゆえ、第2章4-5で言う：自分が語っているのは「人間の知恵による説得されやすい言葉においてではなくて、霊と力の顕示においてである。それは、われわれの信仰が人間たちの知恵においてではなく神の力においてあるようにするためである」³⁸。他方で、哲学者たちの教えにおいては、次のことが真だとされている：コヘ 6, 11「言葉が多くなると、論議することにおいてそれが持つ空虚さも多くなる」³⁹。

16. 第三のもの、すなわち空虚な目的については、次のように言われる箇所を受け取ることができる：コヘ 1, 14「私は、太陽の下で行われることすべてを見た。そして、見よ、すべては空虚で風による患難のようであった」⁴⁰。というのも、もし世俗的な哲学が措定する以外の究極目的がないなら、すべては愚者と知恵者とに同様に生起するであろうし、「学識ある者もない者も等しく死ぬ」からである⁴¹。実際、使徒パウロが一テモ

³⁵ 「コリントの信徒への手紙一」第3章第18-20節「誰も自分を欺いてはなりません。あなたがたの誰かが、自分はこの世で知恵ある者だと考えているなら、知恵ある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。「神は知恵ある者をその悪だくみによって捕らえる」と書いてあり、また、「主は知っておられる。知恵ある者の議論が空しいことを」とも書いてあります」。

³⁶ 「コリントの信徒への手紙二」第3章第5節「何事かを自分のしたことと考える資格は、私たちにはありません。私たちの資格は神からのものです」。

³⁷ 「コリントの信徒への手紙一」第1章第17節「キリストが私を遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架が空しくならないように、言葉の知恵を用いずに告げ知らせるためだからです」。

³⁸ 「コリントの信徒への手紙一」第2章第4-5節「私の言葉も私の宣教も、雄弁な知恵の言葉によるものではなく、霊と力の証明によるものでした。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためでした」。

³⁹ 「コヘレトの言葉」第6章第11節「言葉が増せば、空しさも増す。それが人にとって何の益になるのか」。

⁴⁰ 「コヘレトの言葉」第1章第14節「私は、太陽の下で行われるあらゆる業を見たが、やはり、すべては空であり、風を追うようなことであった」。

⁴¹ 「コヘレトの言葉」第2章第16節「知恵ある者も愚かな者と同様に、とこしえに思い起こされるこ

1,5-6で言うように、「掟の目的は、純粹な心、善き良心、偽りのない信仰に由来する神愛である。或る人々はそれらから逸脱して虚言に走ってしまった」⁴²。

17. さて、もし君が彼らの探究に属する特定性や僅少さに注目したいなら、彼らが事物の諸本性〔*naturae rerum*〕、言述や議論の諸法則〔*leges sermonum et argumentorum*〕、意志による諸慣習〔*mores voluntatum*〕について探究したことに関する限りで注目せよ。実際、[まず]事物の諸本性をめぐってあなたは次のことを見ることになる。すなわち、彼らが物体的本性について見出したことは少なく、理性的本性ないし人間本性についてはさらに少なく、知性的で離存的本性については最も少ない。

18. 物体的本性については、彼らに外在する何らかの附帯性、外的感覚の下に入り込むもの、多数の経験によって知られるものによる以外、彼らは何も言わなかったし言うことができなかつた。それゆえ、事物の種差および種的形相については、個別に確実に固有なものを何も伝えなかつた。それゆえアリストテレスは、『気象論』の終わりにおいて、「事物の種差はわれわれに隠されている」と言う⁴³。われわれの感覚にとっては全くもって隠れている物体および物体の部分や固有性については、彼らは個別に確実なことを何も言うことができなかつた。さらに、全くもって隠れているわけではないことについてもやはり、それらに属する隔たりや〔隔たりに由来する〕疎かな経験のゆえに僅かな判断を有することしかできなかつたし、あるいは判断を有することが全くできなかつたので、僅かなことしか伝えなかつたし、しかも確実なことはほとんど全く伝えなかつた。それゆえ、上位の物体に属する固有性や働きや、大気のうちの上位の領域で生じて他の場所では離れている影響〔*impressio*〕については、論証の道によってはほとんど何も伝えなかつた一方で、蓋然的な理性の道によっては僅かなことだけを伝えた。それゆえアウグスティヌスは、こうした類の哲学者たちについて言う：「彼らが書いたことなかで、多くのものは学問的に確実というよりも臆見である。そして彼らは、臆見として抱かれていることにおいて多くの虚偽を述べた」⁴⁴。なぜなら、アリストテレス自身が『トポス論』で言うように、「多くの虚偽の方が何らかの真なることよりも蓋然的だ」からである⁴⁵。

19. さらに理性的本性ないし人間本性については、諸々の魂の根源および真なる端緒に関して、そしてその諸能力の真理および数に関して何と僅かなことしか書いていない

とはない。やがて来る日にはすべてのことが忘れ去られる。知恵ある者も愚かな者も等しく死ぬとは、何ということか。

⁴² 「テモテへの手紙一」第1章第5-6節「私のこの命令は、清い心と正しい良心と偽りのない信仰とから出てくる愛を目標としています。ある人々はこれらのものからそれて、空論に走り」。

この第三部では、哲学の空虚さを語る際にしばしば「コヘレトの言葉」が引用されていた。ボナヴェントゥラの創造論を「コヘレトの言葉」の形而上学」と表現した次の論文を想起させる：SALAS, V.M., “Bonaventure on the Vanity of Being: Towards a Metaphysics of Ecclesiastes,” *American Catholic Philosophical Quarterly* 90 (4) (2016): 635–63.

⁴³ アリストテレス『気象論』第4巻第7章。

⁴⁴ この引用がアウグスティヌスのどの著作に由来するのかわからない。

⁴⁵ アリストテレス『トポス論』第8巻第11章161a30-31「ある人がありもしないことを真実よりも正しいと思うことは可能であり」(山口義久=訳、『アリストテレス全集3』、山口義久、納富信留=訳、岩波書店、2014年、331頁)。

ことか！ 彼らの著書とこのことをめぐる多様な誤謬を読み通す者にとっては、彼らがそこでいかに僅かなことしか探究しなかったかが十分に明らかである。また、それは驚くべきことではない。なぜなら彼らは、人類の原初的な境遇や端緒をその身体に即してさえも、またわれわれの本性的な悪徳性〔vitiositas〕に関する真理や真なる原因も、かくして人類において付随してきた他の多くのことについても、何も探求しなかったし探求することもできなかったからである。それは諸言語の区分、さまざまな土地に住まうこと、それと類似のことについても同様である。

20. さらに離存的な知性実体については、彼らは最小限のことしか見出さなかった。それゆえ、アリストテレスは『形而上学』第11巻で、自分は諸天球の運動によって55の動源ないし知性体の存在を証明したといわば過大に確信していた⁴⁶。また、それらの知性体に帰される固有性はすべて大抵の場合、誤謬にみちている。なぜなら彼らは、それらについていわば何らかの神々についてのように語ったからである。それは、プロクロスの著書、『原因論』、アヴィセンナやアヴェロエスの諸著書、および他の多くの著書に基づいて明らかに認めることのできる通りである。そして、コヘ3, 11では的確に次のように言われている：「神はすべてをその時宜にかなって善いものとして造り、世界を彼らの論議に委ねた。それは、神が作用を行った業を人間が始めから終わりまで見出さないようにするためである」⁴⁷。また、第1章8では曰く、「困難な事柄全体に対して、人間はそれを言述によって説明することはできない」⁴⁸。また少し後で曰く、「私コヘレトは、自分の心において、太陽の下で生じるあらゆることについて追求し探求することを企図した。こうした最悪の使命を神は人の子らに与えたのであり、それは彼らがその使命に係うようにするためであった」⁴⁹。そして、こうした僅少さの原因が知9, 14-17で与えられる。そこで曰く、「死すべき者たちの思考は脆弱であり、われわれの予見は不確実である。実際、消滅していく身体は魂に対して重荷であり、地上に住まうことは多くのことを思考する分別を圧迫する。そしてわれわれは、地上にあるものを困難にも推量し、見えている範囲のことを労苦とともに見出すが、天上にあるものは誰が探求するのだろうか。あなたが知恵を与えるのでない限り、誰があなたの考えを知るであろうか」云々⁵⁰。

21. それゆえ彼らは、第一原因についても真理に属する僅かなことしか知らなかった。実際、神のペルソナとその固有性については沈黙することにして、神による産出や保全

⁴⁶ アリストテレス『形而上学』第12巻第8章1074a1-17.

⁴⁷ 「コヘレトの言葉」第3章第11節「神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない」。

⁴⁸ 「コヘレトの言葉」第1章第8節「すべてのことが人を疲れさせる。語り尽くすことはできず、目は見ても飽き足らず、耳は聞いても満たされない」。

⁴⁹ 「コヘレトの言葉」第1章第12-13節「私コヘレトは、エルサレムでイスラエルの王であった。天の下で起こるあらゆることを、知恵によって探究しようと心を尽くした。これは神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務めであった」。

⁵⁰ 「知恵の書」第9章第14-17節「死すべき人間の考えは貧弱で、私たちの計画は不確かです。朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋は悩みに満ちた知性を圧迫します。私たちは地上のことさえ辛うじて推し量り、手中にあることさえ見いだすのに苦労します。まして天上のことを誰が探り出せましょう。あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みからあなたの聖なる霊を遣わされなかったなら、誰が御心を知ることができたでしょうか」。

[consistentia]、奇跡や超自然的なことをなす能力、神の報いがある正義や憐みについて、そしてそれによって神があらゆるものに対して現前的かつ最も無媒介的に臨在するあらゆるものへの普遍的な包容力 [continentia] についても、あるいはあらゆるものを創造、制作、保存する能力について、彼らは何を知っていたのか。というのも、以上のことすべてにおいて彼らは明白にも、純粋な誤謬以外にはほとんど何も言わなかったと思われるからである。かくして、次にあるようなことは真だということになる：知 13,1「さて、神についての知が服さない人間どもは空虚である。そして彼らは、善いものとして見えていることから、存在するところの者を知解できなかつたし、諸々の作品に注目しても誰が作者であるかがわからなかつた」⁵¹。また後の9で曰く、「実際、彼らが世を推量することができるほどに知ることができたなら、なにゆえにこの主をより容易に見出さなかつたのか」⁵²。

22. さらに、言述の哲学については、彼らは何をどれほど見出したのかを今は省略する。なぜなら、それにおいて彼らは、われわれの信仰に属することに関してそれほど誤謬を犯さなかつたからである。

23. 人間の諸慣習や政治的統治全体について彼らは何を見出したのかは明らかである。その理由は次の通りである。彼らは、虚偽の至福、したがって虚偽の諸徳をわれわれに伝えた。ただし、人類の贖罪や回復、救世主たる神の恩寵、天使の守護、悪霊に対する闘争やそれによる誘惑の克服については沈黙することにしよう。これらについて彼らはほとんど何も真なることを知っていなかつたし書かなかつた。また、あらゆる人々が真の神への礼拝において、全員が等しく偶像崇拜にあたることをするほど不当に誤謬を犯していたとしても驚くべきではない。それゆえ多くの人が、真の神への礼拝についてよりも偶像への礼拝について多くの著書を物した。それゆえ、アウグスティヌスが『神の国』第8巻第12章で曰く、プラトンもアリストテレスも他の多くの哲学者たちも「多くの神々に犠牲が捧げられるべきだと考えていた」⁵³。ただし章の冒頭で曰く、他の哲学者たちのなかでも彼らは「一なる神についてより善く考究していた」⁵⁴。

(いしだ・りゅうた 日本学術振興会特別研究員 PD (慶應義塾大学文学部))

⁵¹ 「知恵の書」第13章第1節「神を知るに至らなかつた人々は皆、生来空しい者である。彼らは目に見えるよいものを通して、存在するものである方を知ることができず、その御業に目を向けながらも、作者を知るに至らなかつた」。

⁵² 「知恵の書」第13章第9節「世界について推し量るだけの能力を持っていたのなら、なぜこれらのものを支配する主をもっと早く見いだせなかつたのか」。

⁵³ アウグスティヌス『神の国』第8巻第12章「しかし彼らはみな、また彼らと同じように考える他の人々も、さらにプラトン自身も、多くの神々に対して犠牲(礼拝)が捧げられるべきであると考えていたのである」(『アウグスティヌス著作集12』、茂泉昭男、野町啓=訳、教文館、1982年、190頁)。

⁵⁴ アウグスティヌス『神の国』第8巻第12章「実際、わたしは、彼らをもっともすぐれた哲学者たちとして選ぶのである。その理由は、彼らが天と地とを創造された唯一の神について、他よりいっそうの知識を持っているためであり、それだけにますます彼らは他の哲学者たちよりも名声が高く、卓越していると思われるからである。彼らは、後世の人々の判断からしても、他の哲学者たちよりもすぐれたものとみなされていた」(茂泉・野町訳、189-90頁)。